

今回は、神田昌典さんの「神話のマネジメント」から紹介します。

先月、私のセミナーに参加した人と懇親会をしていて、大変面白いことを聞いた。「セミナー参加者の中でこの社長は伸びるかどうか、休憩時間の過ごし方で分かるんです。優秀な社長は、いつもニコニコしながらほかの多くのセミナー参加者と交流を持っているんです。けどこりゃダメだなという社長は、だいたい眉間にシワを寄せていますね。そして休憩のたった5分間で、携帯電話で社内にもいろいろ指示しているんですよ」「どんな指示をしているの?」「それが、細かいところをいちいち指示しているんですよ。そんな姿を見るとああ、この人は、この5分間のために毎日会社に行っているんだ。そう分かるんですよ」誰でもできる仕事の指示をするために会社に何十年も通い続けるわけである。この間違いをあなたも犯してはいないだろうか? 休憩時間の過ごし方でその人の実力が分かるというわけである。

実はあるテニス選手も同じことを言っている。極限のプレッシャーの中で試合をするテニス選手。そのような環境で人はいかに実力を発揮するか? 世界ランキング200位の選手と世界ランキング10位以内の選手の違いはどこにあるか? これをジム・レーヤーという世界的なスポーツコーチが調査した。すると分かったことは、コートの上では技術的にはまったく誰もが同じレベルにあったのである。ところが、何百もの試合のビデオを何回も見ているうちに1つの大きな違いを見つけた。それは、ゲームの間である。ボールがサーブされるまでの間ここに約20秒の時間がある。その20秒の過ごし方が上位の選手と下位の選手とはまったく違う。上位の選手は、20秒の過ごし方がいつも均一であり、落ち着いている。前のボールが最悪でも最良でもまったく過ごし方が変わらないのである。ところが、下位の選手はいいボールであれば喜び、悪いボールであればラケットを投げるという行動を取る。世界ランキングレベルの選手は身体的能力差ではなく、精神のレベルで勝敗が決まることが分かったのである。テニス選手と同様経営者も休憩時間の過ごし方で勝敗が見えてしまう。ダメな社長は、次のようなログセがある。「うちの業界は 特殊だから当てはまらないんですよ」「やってみたんですけどダメだったんですよ」「そりゃ、難しいですね」以上の言葉を言っていたら、ダメ社長というラベルを貼って歩いているようなものである。スポーツ選手は一瞬たりともネガティブな気持ちを持たない。経営者も一瞬たりともネガティブな心を持っていては致命的な欠陥になる。

私はフォトリディングという3日間で最低2倍速く本を読むことができるようになるコースを教え始めてからこのようなメンタルの部分での人間の違いに非常に気づくようになった。そもそもフォトリディングというのは読書なわけだから誰でもできる当たり前のスキル。にもかかわらず、初めのうち、多くの人が「難しい」「ええー、できない」という言葉が出るのである。教えているうちに分かってきたのが能力を発揮するうえで「難しい」という言葉が、きわめて致命的な言葉である。「難しい」と口に出して言うことは難しいということを今度は自分で証明し始める。だから、「こんなのできない」と思ったとたん、本当にできなくなる。それが読書という誰でもできるスキルだからこそ、如実に見えてしまうわけである。「難しい」「できない」というログセはきわめて伝染性の高い病気である。この病気を治す、とても簡単な方法がある。「難しい」というログセが出たとたん「もし簡単だとすると……」という質問を試みる。質問をしたとたん脳はその質問に答えざるを得ないという機能を使うわけだ。異業種の実践事例を聞くと「自分の業界じゃ使えない」「今はできない」「あとで考えよう」と言いたくなる。その場合「自分の業界でできたとしたらどんな爆発的な効果が得られるだろう?」「小さなことでも、とにかくやってみたら、どれだけ儲かるだろう?」と質問してみるといい。「自分の業界ではできない」と思える事例こそ自分の業界に応用できた時大変な効果が得られるのだ。

Q1: 伸びる社長のセミナーの休み時間の使い方は何ですか?

A1: ()

Q2: 自分の周りで、この人は伸びるなと感じる行動・ポイントは何か?

A2: ()